

最終回

亜麻復活の 新たな動き

(1) 新たな需要に 応えられるか

残念ながら亜麻工場は昭和43年（1968）で消滅してしまった。しかし、亜麻や大麻の復活を望む人たちは多い。それは化学に対する反発であり郷愁であると思える。化学合成物質にはその便宜性を享受できるとしても、ときに裏切られることが多く、失望する。

亜麻を復活したいとする会議に出席したことがある。その会社は建築資材を製造している。アレルギー症の人たちから新築家屋に住めないという苦情が出る。年ごとにそれが多くなってきたので何とかそれに対応したい。化学合成物質に頼らないで、ボードを製作するとすれば、亜麻が最適だというのである。あまりにも化学合成物質に頼りすぎた弊害であるのかもしれない。

それにしても昔の人たちには花粉症などは、まったく無縁であった。それが時期になると、警戒警報が発令されるのはどういふことなのであろう。現代の人間がひ弱になってしまったのは、化学合成物質にどっぷり浸るうちに、自然との接触も少なくなり、双方に抵抗力を失ってしまったということであろうか。過ぎたるは及ばざるがごとしなのかもしれない。

それはともかくとして亜麻に需要があるとすれば、それに応えなければならぬであろう。各地に亜麻や大麻の研究会が結成されて、種々実用化が検討されている。

しかし、残念ながら企業化の気配はない。それはなぜかを考えると、ほとんどに生活できる時代にあつては、あえてリスクを覚悟して新しい事業に挑戦するなどはありえないようである。

(2) 亜麻栽培 再開の可能性

明治維新は大政奉還で一つの革命を成功させた。長い間の鎖国から抜け出し開国となれば、列強諸国に対抗するためには何を為すべきか、あまりにも工業技術面に遅れていることを実感すれば、あえてリスクに挑戦し、列強に互そうとする。飢えているときには人間は勉強して、あえて難しさに挑戦するものである。北海道に亜麻産業が成立したのは、そうした人たちによるところが大きいと言つてよい。

第二次大戦後も同じようなものである。戦争が終わって世界からいろんな情報が入ってくると、世界にありにも遅れていることを実感すれば、何を為すべきか、経済界では、資源に乏しい国であれば、技術に生きるしかないとして自動車や電気製



村井 信仁

1932年、福島県生まれ。55年、帯広畜産大学卒業。山田トンボ農機株式会社、北農機株式会社を経て、67年に北海道立中央農業試験場農業機械科長、71年に同十勝農業試験場農業機械科長、85年に同中央農業試験場農業機械部長を歴任する。89年には社団法人北海道農業機械工業会専務理事となる。農業の現場に即した機械の開発や研究、指導で農業経営者から厚い信頼を得た。退任後、67歳にして新規就農を果たし、農場主となる。著書に『耕うん機械と土作りの研究』など。農学博士。

品の生産にあえて取り組んだ。日本人らしい技術を加えて日本を経済大国に押し上げた。

農業とて同じである。どの作物もヨーロッパの収量の2分の1であることを知れば、それに追い付こうとする。トラクタが必要であれば、家1軒新築できるほどの高価なトラクタもあえて導入し、今や収量・品質については世界レベルの水準を誇っている。

ここで亜麻や大麻を復活させようとする気持ちはよく理解するとしても、真面目な仲良しクラブであつて事業として成就させようとする気迫に乏しいように感じられる。もっとも、企業にその意識が乏しいからと責任を押し付けてはならない。企業が頭を下げて頼みに来るシステム作りが先であると思える。

北海道に亜麻産業が成立したのはどうしてかを整理してみると、志士

と言うべきか、侍が北海道にやってきて頑張ったからと言えないことはない。北海道はいわゆるハングリーであったのである。

我慢していれば、ますます貧乏になり、発展などありえないと感じればそれぞれが頑張り、新しい世界を作り上げようとする。その意欲が成功を導いている。亜麻・大麻の復活にそうした猛者の出現を願ってやまない。

おわりに——将来に備える姿勢の大切さ

明治族の侍精神

殖産興業の振興を高らかに掲げ、北海道が最初に取り組んで成功したのは亜麻産業である。工業にあまり縁のなかった国が取り組むについては、実に度胸のいることであつたと言えるが、明治維新は一種の革命であり、戦乱の渦を乗り越えてきた人たちにとっては、革命の成果として何か新しさに取り組まざるを得なかった。あえて、虎穴に入らずんば虎子を得ずの心境で挑戦したと思える。

北海道は開拓を始めたばかりであり、生活が安定していたというような時代ではなかった。何もかも揃えながらの事業展開で大変であつたであらうが、武士の時代が終わり、何

海外国際協力事業団（JICA）の仕事で、何回か中国の黒竜江省に赴いた。仕事を終えて任地周辺の農業事情を視察していると、海倫県で亜麻の茎を馬車に満載して運んでいるのを見掛けた。聞いてみると、この界限は戦争中から亜麻を栽培しており、現在も亜麻工場が操業しているとのことであつた。

台湾にも進出していたので、中国ではそれが残っていたのである。中国は化学合成繊維産業が遅れており、ハウスのビニールフィルムやマルチフィルムなども高価であり、貴重品扱いであつた。そんな環境では、亜麻は貴重な繊維なのである。

我が国では、亜麻や大麻を復活させようとして関係者がいろんな努力をしているが、黒竜江では依然として企業化されており、羨ましいと感じる。初期の亜麻産業発達には、地方とはいいながら、胆振の果たした役割が大きい。明治26年（1893）から近江麻糸が2工場、日本織糸・日本製麻の4工場が建設されている。

かをしなければならぬ者にとつては、ある面ではやり甲斐のあることであつたろう。特に東北の藩は賊軍であつたことから新政府には冷遇されており、どこかに新境地を求めなければならなかった。

伊達に入植した人たちは、殿様を先頭に一族郎党揃つての入植である。もつとも新政府は殿様たちの処遇に困っていたので、北海道開拓に乗り出すについては、いろんな優遇措置をしている。ある面でこれは一つの機会であつたろう。交通の便もあつたが八雲には徳川藩も入植しており、胆振は開けるのが早かった。

亜麻産業は国策も絡んでおり、亜麻の栽培には積極的に取り組んでい

る。初期の亜麻産業発達には、地方とはいいながら、胆振の果たした役割が大きい。明治26年（1893）から近江麻糸が2工場、日本織糸・日本製麻の4工場が建設されている。

農商務省技師吉田健作はヨーロッパに亜麻産業の実態を調査し、北海道に亜麻工場を建設するために奔走するが、明治族の侍精神を感じることができると。北海道の亜麻産業は行政・企業・農民一体となって形を整えるが、明治族の気骨、侍ならではの矜持に畏怖の念を抱かされる。

バレイシヨ澱粉工業も開拓農村の経済を豊かにするが、この場合は若干体質を異にしている。家内工業的な体質であり、企業が介入するにしても大企業が先導することはなかった。華族や富豪の大農場が比較的大

きな澱粉工場を所有する程度であり、発達して澱粉工場を建設するにしても零細企業の範疇であつた。大企業の亜麻工業とは好一对の対比である。

大正・昭和族の生き様

第二次大戦が終決すると、北海道農業も大きく変貌する。権勢を誇った華族農場は農地改革で消滅し、小作農は地主から解放されて自作農の時代を迎える。年貢を納める必要がなければ、農業経営は自分の意志次第と農家は意気軒昂頑張りをみせる。戦後の食糧不足は新しい自作農の努力によって補われたとさえ評価されている。

ここには一つの伏線もあつた。第二次大戦は明治族によって引き起さ

れたが、戦争で実際に戦地で戦ったのは大正族である。大正族は半分が戦死したと言われる。生き延びて復員した大正族はたまたま生かされて帰ってきたと考えている。戦場は誰が死んでもおかしくなかったからである。

日本を滅亡させたのは自分たちであるが、自分たちはその日本を復興させなければならぬ。そうしなければ、隣で死んでいった戦友に顔向けできないと考えている。

戦後、日本の農業はあまりにも遅れていたことを思い知らされる。北海道の作物の収量はいずれもヨーロッパの半分ほどなのである。農業に携わる者はヨーロッパに追い付けを標榜して敢然と取り組むことになる。

トラクタと畜力の違いを知らればトラクタを導入することを考える。当時、輸入トラクタの価格は、30馬力級で家1軒新築できるほど高価なものであった。

しかし、身近に戦後の緊急開拓事業・耕土改善事業でトラクタの威力を実感しているの、自分たちはホイールトラクタを輸入しようと考えている。当時、北海道ではトラクタ営業は成立しないと各方面から反対されるが、怯まなかった。どのように採算を合わせたかと言えば、賃耕である。深耕すれば土地の生産性が高まる

ことは、どんな農家も知っているの、賃耕の依頼が多かった。親子・兄弟などで手分けして、シーズンにはフル稼働で賃耕に勤しみ、2年くらいで資金を回収してしまったと言われる。

これは農業の現状を知る人の強さであり、復員兵の義務感が為さしめた成果である。机上で考える人たちにはとてもできないことである。復員して家督を譲られた30代の若者の挑戦があつて、瞬く間に耕馬を追放し、機械化営農体系を構築してしまった。根菜類の反収は3倍に達し、豆類でも2倍である。反収と品質では、ヨーロッパを凌駕してしまっている。

ここに大正族の生き様を見ることが出来る。第二次大戦後は大正族の頑張りで一時代を構築してしまつた。昭和一桁族は少年兵で志願した人たちが若干戦死している程度である。戦争の経験はあるがほとんど戦死はしていない。第二次大戦後は大正族に従つて、惜しまず働き、大正族を支えた。

平成族の働きに委ねる時期

昭和40年（1965）ごろからトラクタの利用が加速するが、亜麻栽培は昭和42年（1967）で終わりととなる。我が国は工業が発達してき

ただけに、化学合成繊維がすごい勢いで一般に利用されるようになってしまった。新しい路線だけにこれを阻む雰囲気はまったくなかった。しかし、今にして思うと、あの時期に亜麻を残すことは至難であつたであろうが、歴史は繰り返すことからすれば、何らかの形で少しは残しておいてもよかつたではないかと考える。

亜麻繊維にはそれならではのよさがあり、また亜麻仁油も貴重である。屑繊維や碎茎時に排出された茎殻などの副産物を利用した建築ボードなども考えられることからすると、将来に備える姿勢のなかつたことが反省される。

コメが余つたから転作をする。コメ以外の作物を作れば奨励金を出すという国である。膨大な費用を投じて水利を完備し、それを急に使わないうというのは、あまりにも計画性に乏しいと言えよう。

その短絡さが日本人の欠点とするなら、大いに反省すべきである。亜麻復興に思いを寄せても後悔は先に立たずである。

現在はほどほどに食べていける時代であり、平和である。身近に動乱が発生する気配もなければ、明治族や大正族のような出番もない。昭和族も決して平穏な生活をしたわけでは

はなく、新しい時代を作ることに貢献はしてきたと言える。

しかし、もはや平成族に委ねる時期であり、平成族の働きに期待するばかりである。

「亜麻物語」参考文献

- ①北海道十勝における農業機械化の展開 小野哲也編著
- ②北海道における亜麻事業の歴史 原松次
- ③北海道統計100年の歩み 北海道統計協会
- ④北海道農林水産統計
- ⑤帝國製麻株式会社30年史
- ⑥帝國製麻株式会社50年史
- ⑦北海道亜麻事業70周年記念誌
- ⑧北海道農業技術研究50年 北海道農業試験場
- ⑨北海道農業発達史上巻 北海道立総合経済研究所編